

第17回見学会 日時：2010年6月6日 見学館：国立ハンセン病資料館

6月6日、我々は「国立ハンセン病資料館」を見学した。同館は東京都東村山市にある「ハンセン病に対する正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消及び患者・元患者の名誉回復を図る」（国立ハンセン病資料館パンフレット）為に設立された資料館である。

思い返してみれば、我々研究会の母体ともいえる中村ゼミにおいて、中村先生はこのような決して明るくはないテーマを扱った博物館の重要性を説いていらっしやった。そのためゼミの見学会でも同館をはじめ差別や戦争



といったテーマを扱った博物館を訪れたことがある。我々にとっては博物館を考える上で一つの指針ともいえる博物館と思われる。

2001（平成13）年に、小泉政権下で行われていたハンセン病訴訟においてこの病気を知った方も多かかもしれないが、この病気の歴史は古く、日本書紀に既に記述がある。資料館の展示はまず古代から近世にいたるまでハンセン病の扱われ方を紹介している「歴史展示」、癩病患者を隔離していた「癩療養所」に関する展示、そして患者や元患者たちによる、生活改善や文化活動、社会的自立への取り組みを扱った「生き抜いた証」という3つの常設展示室と、企画展示室で構成されている。当日は「着物にみる療養所の暮らし」という企画展が行われていた。

さて今回は常設展示室「生き抜いた証」で展示されている患者・元患者の趣味や娯楽に関する展示を取り上げる。この資料館において僅かであるが気持ちが穏やかになる空間である。文芸、音楽、陶芸、絵画、写真等々、患者・元患者たちが様々な苦難に遭いながらも生活を掴み取り、生き抜いた証のように感じた。かつて大阪人権博物館を見学した際には、気持ちが穏やかになるような展示空間はほとんど無かったと記憶している。このような手法では差別の実態を伝えることの重要性を理解していても、伝えられる側の気持ちが萎縮してしまうことは考えられないだろうか。そういった意味でもハンセン病資料館における手法は伝え方として、よい方法なのではないかと感じた。

それから個人的な話になるが、患者が療養所に入所する際に所持していた現金が展示されていたのだが、そこには筆者が幼き頃使用していた伊藤博文の千円札が含まれていた。こういうものを目にすると、これらの問題はつい最近まで行われていた出来事であるのだということを、改めて考えさせられる。

【歴史民俗資料学研究科 修了生：金田晋也】